
異世界にやってきました！！

野々村イチゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にやってきました！！

【Nコード】

N6813Y

【作者名】

野々村イチゴ

【あらすじ】

ベッドの上でシエスタなうの少年ヒロキ

ある日突然女神に異世界にとばされちゃった

その世界は剣と魔法の世界と小学生なら誰でも夢見る世界

だが現実甘いもんじゃねえんだ

魔王はゴロゴロ存在するわ

最初から弱い魔物なんていないわ

戦う人はみんな大人でヒロキたちの年齢は畑仕事をする年だったり

魔王は鬼畜ですか？

という世界。魔王を倒す前に生き残れるかが問題となった。

プロローグ

『目覚めなさい』

声が聞こえる

『目覚めなさい、異世界の住人よ』

まだねみーつつの

『目を・・・』

「あと30分くらい寝かしてくれ」

まったく 朝から誰だよ俺は朝は弱いんだぜ

『目覚めなさい異なる所からきたる人間よ』

・・・・・・

『起きなさい』

・・・・・・

『起きな・・・』

「しつけえ」

『つつっー・・・』

・・・・

『起きろゴルアアア！！！！！！！』

「ひっひい！？」

『いつまで寝とんじゃ！このタコ！さっさと立てい！』

なななななんだあー？

コイツはいつたい！？

『目覚めたのですね異世界の人間よ』

「いや、まだ中二病になった覚えはないっす」

『いやいや、そうじゃなくってww、アンタの世界じゃないのここは』

「はい？」

と口にはだしたが 確かにここは俺の部屋じゃねえな

しかも目の前にはいかにも 私は女神でえーすみたいな服装をしている女性がたっていたり

あんた誰だよ こことだよ 俺はねみーんだよ

『私は女神』 『私は女神』

二回言った！！

俺はなんかめんどくさくなったので

「おお、女神よ私めになんのご用でありますよう？」（棒読み）

『なんかウザいから説明できとくにしちゃっよ?』

「ちゃんと事の説明をしてください!」

はあ 面倒なことになった。

『あなたは这个世界でやるべき事をしてください』

「えっと・・・つまり俺に勇者的ポジションに立てと?」

『おっ! 話わかってるうー』

『そういう事だからがんばってねー』

まてまてまて。

「この世界の説明をしてほしいんだが」

まずは情報だ え?さらわれてる感じなのにやる気マンマンだって
? 勘弁してくれよ

『この世界は魔王的ポジションの奴が数え切れないほどいるの』

「まてい! 世界救えねえよ もう無理だよ! 終わりだよ」

『まあまあ 魔王には悪い奴といい奴がいて、悪いのだけ懲らしめて
ちよーだい』

いい魔王って・・・勇者30を思い出すな

『とりあえずそんなところだから』

「一人でですか？」

『そうだけど・・・イヤ？』

ひとりでは無謀というものだろうに

『もしよかったら仲間をアナタの世界から呼び寄せてあげるわよ』

「仲間？」

『そう！仲間、知り合いで名前を言いなさい、ポンってここに召還しちゃうから』

仲間か、やっぱり職業とか考えたほうがイイのかな？

『職業はその人に合ったものをこちらで一人三つ用意するわ。だからアナタの世界の友人の特技や能力をしっかり理解しているとパ―ティが充実するわ』

ドラ。エか！

一人三つか そのうちのどれかを選ばせればイイのか

『そうそう、職業はおなじみなものの他に村娘や変態、詐欺師、娼婦、カメラ使いとかもできるわよ』

「いらなす！」

ロクでもない職で魔王に挑むのわバカだろうに。

まずは自分の職業か

『身のこなしが比較的軽いアナタはこの三つね』

シーフ 身のこなしMAX 基本短剣やライトソード スキルはあまり戦闘では役にたたない

ストライカー 身のこなしがよき格闘家 基本グローブ系の武器が爪 戦闘では連打や雷をまとったアッパーや属性をもった攻撃ができる

ライトソード（軽剣士） 軽めの剣を装備し多彩な技で敵を攪乱魔法もちよつと使えるが あなたの知力しだい

シーフは戦闘で使えないな

ストライカーは魅力だが元剣道部としてはライトソードの方が使いやすいだろうが

しかしな、やはりスピードと手数ของストライカーがそれとも華麗な技のライトソードか？

迷うなあ……

『ライトソードにしとけば？ありきたりでいいんじゃない？』

ありきたりと言つのもやだ

というわけで

「ストライカーをお願いします」

『はいね　まあいいけど。』

『それより他の子は？』

そういえばまだ決めてないな・・・

とりあえず仲良しの・・・

『ユウノスケ略してユウノね他は』

略すなよ・・・他は剣道部から一人

前衛が欲しいな・・・

多少な傷でも大丈夫な奴は・・・いた（笑）

部活引退してから太るの嫌と言い、毎日筋トレしてる奴（笑）

「カズキつてのを」

『わかったわ、あと一人ね』

やっぱり4人なんだ

魔法を使えそうな奴はと・・・

カズキは勉強できるが足遅いしな魔法使いタイプではないしユウノは問題外

後輩から取るか

「マコトください」(ブリトラのコンビ二風に)

『マコトだけですか』

おっノツてきやがった

「以上でいいわ」

『かしこまりましたー』って本当にイイのかい!？』

「まあ奴等ならなんとかかなりそうだしな」

俺は一応信頼している

『じゃあちよつと待っててね』

〓〓30分後〓〓

『彼らにもサッサと説明を済ましてきたわ。ついでに職業も決まったわよ』

いちいちウィンクしてくるこの女神

そして彼の友人たち

カズキ ガーディアンナイト

つまり守ってくれる。重装備で戦斧や槍など長物系

『彼、魔法の適正があつたみたいよ、けど回復魔法と接近魔法しか使えないから』

ユウノ ハンター

基本弓での長・中距離攻撃だがナイフや手斧といった武器もそこそこ扱える

マコト バトルメイジ

武器での戦闘もできる魔法つかい、だが守備が低く重装備ができない

魔法全般つかえる

ヒロキ ストライカー

(省略)

『つてな感じよ』

「あの装備は？」

『あっちについたら自動で装備してるわ。』

『そういうわけががんばってきてねー』アレ？意外とこのメンバーでいけんじゃね？

こいつら選んでよかったわ。

さてはて行くとしますか

『じゃ、送ってあげるわよー』

『バシ。ーラ』

「ちょwwwそれDray」

（シュン！）ワープしますた

『はあー、めんどうな人間だったわ』

ようやく始まったのです（前書き）

まだまだ作家のタマゴ以下の文ですね ハイ

もしよかった感想や意見とかを聞かせていただければと思います。

ようやく始まったのです

とある森

そこにはこの世界では見慣れない、少年の冒険者たちがなにやら話し込んでいる様子。

「なして俺らをよんだんだヒロキ？」

口を開いたのは肩幅がひろくがっしりとした少年

「なんか戦闘できそうだから、いかにもおまえ肉体系じゃん！」

ヒロキと呼ばれた少年は仲間に事情を説明する。

「まったく！ヒロキは事前に連絡して欲しいな」

「ユウノはノリノリだぞカズキ」

「・・・オイオイ」

はあーっとため息がこぼれる

「ヒロキ先輩」

「なんだい？まこちゃん」

「その呼び方やめてくださいよ。なんでコスプレみたいな格好みになしてるんですか？」

「そうだな俺も聞きたい」

「うっほほい 俺かつこよくね？ハンターだぞ」

一人はノリノリである

「この世界での正装らしいよコレ」

「やっぱりそうなんですか。けどなんでカズキ先輩しか鎧着てないんですか？」

カズキと呼ばれる少年は、ドラ。エの皮の鎧の鉄バージョンを着ていた

更に武器は槍と盾いったどこぞの兵士といった装備

それに対してヒロキは簡単な胸あて、皮のグローブと比較的動きが制限されない装備で

ユウノは布の服に羽付き帽子、弓、短剣だった（防御の面で差がありすぎるな）

どうにも前衛はカズキにまかせるようである。

「先輩、俺の装備なんか布の服にライトソードですよ」

「俺なんか皮のでぶくろオンリーじゃん」

はぁーっとまたもやため息をつくカズキ、そこでユウノが。

「頭の中になんか使い方がうかんでんですけど」

「言いおもむろに弓を近くの木に向けて

「ツインアロー」

と言いながら矢を放った

ドシュッ ドシュッ

と短い単音で矢が2本 木にささった

「「「!!!!!!」」」

「俺って天才？ すごいね？すごいね？」

どうやらスキルらしきものはすでに持ってるらしかった

「ほほう。なるほど、さすが剣と魔法の世界だのう」

「俺もできる気がする」

拳をストレートのように放ち

「サンダーフィスト！」

稲妻をまとった拳ですさまじいパンチをくりだす

「おお！できるでる！」

「次は自分が」

手を目の前に突き出し

「FLAME！」

「なんか発音シブイ！」

火炎が手を向けたあたり広範囲にくりだされる

一同「お前だけなんかズルイ！」

「魔法なら俺も使えるが」

とみているだけじゃつまらないと腰をあげた。

「ヒーリング！」

誰も傷ついていないのし回復魔法を放った

「カズキゝ意味ないじゃん」

ムっとしたカズキは槍を構えて軽く横に薙いだ

「スラッシャー！」

刃の軌跡がそのまま前方に飛んでいく

「おっ！いいこと思いついた、マコトその剣ちよつとかせ」

剣を構え下から振りあげた

心でスラッシャーとつぶやき

「魔神剣」

「テイ。ズか！」

「それは著作問題だからやめなよ！」どうやら戦闘はなんとかできるようだ

「さっそく町にいきたいんだけど。ここってどこ？」
「・・・・・・・・・・」

ユウノの一言で全員沈黙。

地図は一応あるがドラ。エみたいに現在地を示すなんてチートな地図なんかあるわけない。

結局、森の中をさまようことになった。

～～～5分後～～～

やはり剣と魔法の世界で森をふらつくと出てくるもの出る

（敵意まるだしの骨だけの兵士がいる）

「いかにもモンスターな奴が どうする？どうする？」

「先輩ここは自分の魔法で」

「いや、俺がたたいてくる」
槍をふりかざし敵さんに歩み寄る

たのもし仲間がいてよかった、と思うヒロキであった。

「カズキ、そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ問題ない」

エルシャ。イ ネタで仲間にこえをかける、やっぱりこれが一番だなと

カズキ「ガトチュ！エロスタイム！！！」

まさかのフタエノ。ワミ！？

ズシャッと鋭い一撃は

骨だけの相手の顔に直撃！！

骨がくだけちつて、サラサラサラと砂のように風にふかれ消えてしまった。

どうやら倒したようだ、先手をとれば余裕のようだ。そのモンスター
の足元にキラキラ光ものが

（なんだコレ？金？）

ユウノ「カズキはがいこつを倒した、ゴールドを手に入れた」

一人 やけにハイテンションである。

どうやらこの世界の通貨らしい、100Gと書いてある

ヒロキ「ひゃくゴールドでいいのかな？」

カズキ「ガリオンだったりして」

ユウノ「間をとってゴルオンまたはガリゴルもしくはガリガリ」

ヒロキ「100ガリガリってなんだよwwアイスマてえだなww」

さて日が暮れる前に森を抜けないと。

がしかしモンスターを積極的に倒さないと宿に泊まる金もない。

というわけでやっぱりフラフラする。

〓 1時間後〓

さすがに歩き疲れたが森は抜けられない、その代わり川の近くで馬車を見つけた。

とても普通の馬車で赤茶の毛並みの馬がただずんでいる

どうやら馬車の主は川で水を飲んでいるあそこの人だろう

カズキ「初めてのこの世界の住人との接触だが、誰が行く？」

と一斉にヒロキの顔を見る

ヒロキ「わかったよ、俺がいきゃあいんだろ。まったく！」

しぶしぶながらも行くことになった。

ヒロキ「すみませんが、道をお訪ねしてもいいですか」と振り向いた人はなんと！女性だった！

（うわっ、なかなか美人だ・・・）

服装を見ると

すらっとした細い体にちょこんとはりでた小さい双丘

赤い髪の毛にスカイブルーの瞳

浅黒い健康的な肌に

肩を出した動きやすそうな軽装

女武闘家のように 年は22歳くらいか？「なんだい？ボウヤ」

手慣れた冒険家だろうか？

というかボウヤって言われた。

「ボウヤじゃないです、ストライカーのヒロキです」

ムキになってしまう

自己紹介も兼ねて職業をいう

それにしてもすばらしいプロポーションだ

「なに言ってるんだい！ ボウヤたちはまだ子供だろう
まだ森に入るなといわれてないのかい？」この世界では、魔物に子
供は戦わないらしい。

「一応、自分ら冒険者なんですが」

「子供で冒険者って！、危険を通り越して無謀だわ！」

（この世界では冒険者平均何歳だ？）

めの前の女性が驚いている

母親がヤンチャな子供をしかるように言ってくるな、と思っている
と。「ミリー、どうかしたのかい？」

馬車の中から声が聞こえる。

どうやらこの格闘家の女性はミリーというらしい

「ちょっと来てよナナ！、かわいい冒険者たちが来ているわよお」

ごそごそと馬車から同じく赤髪の女性が出てくる

こちらは女戦士アマゾネスのようだ、いかにもアマゾネス風の露出の多いメイ
ルに

腰にはブロードソードを装備している

「あらあらまあ！、かわいいストライカーのボウヤね」

おばさん口調で言われる、だからボウヤじゃないってのに。

「こんにちはみなさん、私はナナ。で隣にいる格闘のおねえさんが
ミリーおねえさんよ。」

「よろしくボウヤたち」

（ここまでボウヤで通されると恥ずかしいな・・・）

なんとなく悪い気はしない少年一同

カズキ「えっと・・・その・・・道を聞きたいんですが」

カズキがようやく口を開いた、俺あんまり異性としやべるの得意でないんだよね

ミリー「何言ってるのよお、子供はおうちに帰りなさい！」

カズキ「だからココがどこかも分からないんですってば、申し送れましたカズキです」

ユウノ「イーノックです」

マコト「違います、コノ先輩はユウノで私はマコトです」

ナナ「お行儀がよいのねえ、いい子達よ、ねえ」

俺らはそんな年下ではないが

ミリー「ここがどこだかも分からないのかい？、それなら丁度イイや、私たちのギルドに連れてってあげるわ」

さすが剣と魔法の世界、ギルドはやっぱりあったか。

ナナ「あなた達、ギルドにまだ入ってないでしょう」

ヒロキ「っえ？、あ、ああまだ入っていないです。」

そりやあまだこの世界に来たばかりだからな。

ナナ「ギルドの紋章が装備に付いていないもの、すぐ分かったわよ」

そういわれてよくみると、ナナのメールの胸の部分に羽の紋章が彫つてある。

ミリーには、ズボンの部分に紋章が。

「ギルドにも入らずに冒険ってあなた達何で稼いでいくのよ、モンスターが落としたゲインだけじゃ生活できないわよ。」

あ、ゴールドでも、ギルでもなかった。

「ミリーそろそろいくわよ、コノ子達をつれてフィリアに帰らないと。くらくなっちゃうわよ。」

ミリー「そうね、子供の冒険者っていう異例の事だからね、ギルドに早くつれて帰らないと。」

つれて帰るって、俺らにとってココは異世界なんですけど。

っと言ってる間に馬車は出発してしまった。

ギルドってどういうのだろう、うーん・・・酒、メシ、ムサイオトコしか想像出来んな。

で仕事の依頼の場所かな？

ふと考えている時、

「みんなさがって！ー！！」

ミリーの慌てた声が聞こえてきた。

ユウノ「やヴあいよこれえ」

カズキ「まずいな」

前方に先ほどのガイコツの兵士が・・・

20体ほどいますた

マコト「フレイム！！」

バコォーン！！

もう始まってらしい。

流石にコノ世界に来たばかりの俺らには荷が重過ぎるぜ。

マコトは魔法使い、対多数のザコ戦には向いているが、なにより数
が多すぎる。

魔法だけじゃ対処しきれないか。

ミリー「ライティングミドル!!」

ヒュバツ

高速の蹴りが放たれる

どうやらコノ人達は戦えるっぽい。

ナナ「プロミネンス!!」

ゴォー!

すばらしい炎をまとった剣技に驚かせられた。

さて我輩も戦闘に参加しますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6813y/>

異世界にやってきました！！

2011年11月21日07時00分発行